

千葉商科大学遠藤隆吉研究所講演会 2025年9月18日

千葉商科大学総合研究センター 遠藤隆吉研究所講演会 遠藤隆吉先生と神道

東北大学特任研究員 木村悠之介



1

千葉商科大学遠藤隆吉研究所講演会 2025年9月18日

はじめに① 自己紹介

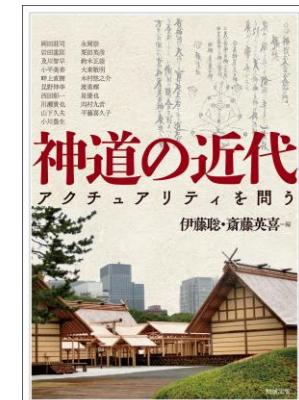
- 近現代の日本における宗教・神道
- 国家神道・久米邦武・神前結婚式 etc…

➤ 伊藤聰・斎藤英喜編

『神道の近代 アクチュアリティを問う』

(勉誠出版、2023年)に

「神道学を建設する—井上哲次郎門下・
遠藤隆吉と「生々主義」の近代」を寄稿



- 今回は、同論文の内容を元に前提や補足を追加(以下、敬称略)



2

はじめに② 「神道学」の提唱者としての遠藤

- 1933年の読売新聞社『宗教大観』:
「特に神道学者を標榜せぬが頗る熱心」
「神道研究の必要を常に力説」
- 近代における「神道学」:
1920年に東京帝大神道講座
(哲学の井上哲次郎と国文学の芳賀矢一提案)、
1923年に同神道研究室、
1926年に同研究室中心の神道学会

▶ 遠藤による「日本神道学の建設」は1917年



Next →

3

はじめに③ 神道学史研究と遠藤研究

- 神道学史研究:
東京帝大神道講座の田中義能(井上門下)・
加藤玄智(同)・宮地直一、國學院大の河野省三などは
研究されてきたが……

▶ 遠藤は専門でないにもかかわらず先駆的

- 遠藤研究:
社会学や中国哲学、「エンドイズム」「生々哲学」

▶ 実は神道学と「生々哲学」は密接に関わる



Next →

4

はじめに④ 「神道学」への否定的目線と久米邦武筆禍事件

- 近世の平田篤胤は、先行する吉田兼俱や山崎闇斎などを論難する際に「神道学者」の総称を用いている
- 近代では小中村(池辺)義象や久米邦武らの議論に見られるように、国文学や国史学が乗り越えるべき対象として名指される
- 久米邦武「神道は祭天の古俗」(1891年): 古代の神道を「祭天」「惟一の天神」祭祀と考えて「国帝の祖先」への「宗廟」祭祀の本来性を否定し、事件化
- 久米事件後に、久米批判者が「神道学」研究を模索する動きも

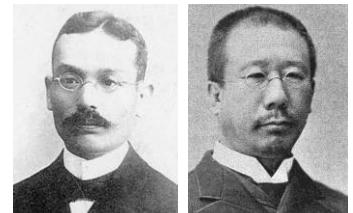


Next ➔

5

提唱まで① 東京帝大在学時の教員陣と神道

- 1896年に東京帝大哲学科へ入学、井上哲次郎・R. ケーベル・元良勇次郎・外山正一らに学ぶ
- 井上と外山は前年に「神代の女性」論争
 - 遠藤は、1903年の社会学研究室開室式での講演や1908年の著作で、神代における女性の位置を低く見る(井上寄り)
- 蝦名によれば、在学中のノートに神道を「werden(生々)の説」と記したものがあるというが、巣鴨学園での現存は不明



Next ➔

6

提唱まで② 雑誌『日本主義』の存在

- 井上・元良を含む大日本協会が1897年に発刊。議論を主導したのは井上門下の木村鷹太郎
- 易經由來の語「生々」を核とする同時期の神道論。
近世では水戸学の会沢正志斎が近いが、木村は天祖ではなく「国祖」の崇拜を説く（「革命」の忌避と「天」）
- 鈴木大拙：イギリス流哲学に拠る木村の宗教攻撃と「生々」論を批判
- 後に遠藤が参加する丁酉倫理會も、『日本主義』に対抗する有力な動き。
以降の様々な神道論は「宗教」を否定せずに「生々」を語る方向へ

生
み
く



Next ➤

7

提唱まで③ 「東洋倫理学」としての神道研究

- 1904年『日本社会の発達及思想の変遷』：
「日本社会を結合」する「宗教」としてアマテラス崇拜や「祖先崇拜」
- 1908年「東洋倫理学の建設」（『丁酉倫理會倫理講演集』）：
「天」の觀念（木村は忌避）を東洋や日本に「固有」な思想と捉えなおす
- 1909年「神道興隆国粹發展論」（『太陽』）：
「東洋倫理学」の中心となるのが「神道」における「天祖教」だとする
- 「国家競争の夥しき時代」において、アマテラスの天壤無窮神勅より、イザナギ・イザナミの国生みを「国家建設」の教えとして重視

Next ➤

8

提唱まで④ 同時代の反応

- 1909年の『國學院雑誌』:
皇典講究所・國學院の設立(1882年、90年)以降における国学の動向として、「日本主義即ち新神道」を「最も顯著なるもの」とする。日露戦争後については、井上哲次郎の東亜協会(1906年~)、皇典講究所における神道研究会(1907年~)、上田万年らの神道談話会(1909年~)などを列挙。「新なる国学」へ
- 「天祖教を中心とする他宗教の「採長補短」を説く遠藤の議論を、「最も吾人の理想とする所に適へり」「敢て新説とすべきにあらざれども、近來の快文字たり」と評価

Next ➤

9

提唱まで⑤ 「主義」と「学術」の統合を目指して

- 1900年の木村鷹太郎による『東洋倫理学史』は、法則としての「学理」「倫理学」と現象としての「倫理」を区別し、「日本倫理学」を「日本主義の教育」と呼びなおす
- 遠藤は、「日本人の倫理意識」を体系化すればそれ自体が「歴史的・社会的な個別性を持つ「学」になりうると反論
- 「主義」(日本主義・神道)と「学術」の距離が縮まっていく
- 井上哲次郎による1907年の議論や、教え子・田中治吾平による1912年の『神道哲学』に遠藤が寄せた序文にも同様の意識



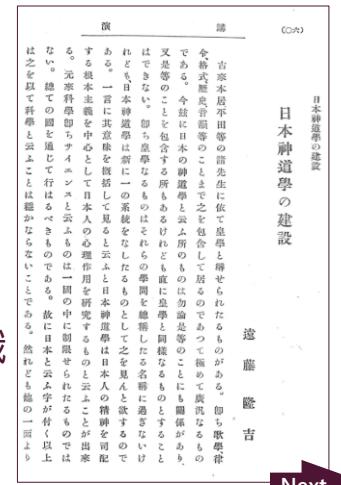
Next ➤

10

千葉商科大学遠藤隆吉研究所講演会 2025年9月18日

神道学構想① 「日本神道学の建設」講演

- 1917年10月、
東京府外七県神職連合会で講演
- 10~12月の『全国神職会会報』(未校閲)、
12月の『丁酉倫理会倫理講演集』に掲載
- 全神版では世界の東西における日独の並立、
丁倫版ではロシア革命による君主制の危機を意識

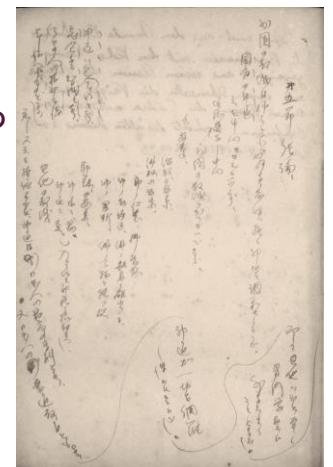


11

千葉商科大学遠藤隆吉研究所講演会 2025年9月18日

神道学構想② あらゆる知識の根柢としての「日本神道学」

- 「日本神道の根本」は「生々主義」で、
アメノミナカヌシやムスピ、宇宙と人間がつながる
- 「生々主義」からは皇統中心の「祖先崇拜」など、
様々な「日本の習慣と道徳」も派生
- 「日本神道学」は「日本人の宗教」「日本の哲学」。
農工業などにも関わり、「腹に落ちる学問」
- 同時期の「生々主義」論としては、岩野泡鳴による
雑誌『日本主義』の新宣言文(1915年10月)



12

神道学構想③ 同時代における久米事件への想起

- 1915年の遠藤『社会学近世の問題』:
学説は「事実で判断するもの」だから「有害」ではなく、
「神道は祭天の古俗」が「今日では殆ど議論にはならない」
(学問の自由によって祭天論文も問題がない時代に)



- 1916年の『教育学術界』誌で、谷本富が祭天論文の再評価と
「祖先崇拜」批判を行い、田中義能ら多くの学者が谷本に反論



▶ 1917年の「日本神道学の建設」による「生々主義」論は、
アメノミナカヌシ(「天」)も「祖先崇拜」も組み込む体系。
前年の論争を調和させるような役割を期待した？

Next ➔

13

神道学構想④ ムスピのデモクラシー？

- 外国の学問や宗教も「日本の利益になるもの」は何でも取り込むべき
- 1920年の神道各教派連合会における講演(『日新』):
「デモクラシー」は「人格の平等」であり、「神道に於て已に古くより」、
「産靈」の神による各人への人格付与という形で唱えられてきた。
「君は君たり臣は臣たり、父子たり兄弟たり夫婦たり」
- ▶ デモクラシー状況を意識しつつも「人格」論に逸らして毒抜きを図る
- 1923年の『国体論』では、家庭における神道祭祀や「生々主義」の默考、
「日本神道学の建設」を「中産階級の任務」とする(米騒動時執筆)

Next ➔

14

神道学構想⑤ 同時代における神道とデモクラシー

- 当時の神道界では流行の話題
- 田中義能:アマテラス・ムスビと八百万の神々による会議
- 1919年の神道談話会における座談会「神道とデモクラシー」:
祭政一致や万機公論(山本信哉)、
僧侶貴賤の神宮参拝(高橋龍雄)、
個人の自由尊重(田中治吾平)、
「いい処をとれば皆神道」(筧克彦)、
「我々が我国家を建設」(紀平正美)。高賀詠三郎・沢田五郎は否定



Next ➔

15

神道学構想⑥ 東京帝大神道講座の動き

- 1920年に講座設置、23年に研究室、26年に学会
- 1922年2月の東京帝大文学部教授会:
田中義能が加藤玄智・宮地直一とともに、
「神道」を「高等学校、中等学校、無試験検定二
冠スル科目中、修身、及び哲学概説中ノ一単位」に
加えること、さらに大学内で国文学・国史学・倫理学・
宗教学宗教史・哲学の一単位として認めることを提案



➤ 音沙汰なし

Next ➔

16

神道学構想⑦ 神道青年会運動への期待

- 1931年の**神道青年連盟協会**:
國大・日大・東洋大・慶大が連合
- 遠藤は、青年を**マルクス主義**から
護るために「神道研究」の普及を求める
- 日蓮主義者の里見岸雄が、
遠藤を「プロレタリア」に向き合いえない
「観念的国体論」の一つとして批判した際、「ブルジョア神道」としての
「神道学の建設」と「プロレタリア神道」の二分に異論を呈して遠藤を
擁護した人物(鈴木四郎)も出たが、結局**運動はうまくいかず**



Next ➔

17

提唱以降① デモクラシーをめぐる動揺

- 遠藤は巣園でアマテラスを祀るなど**私学教育**に注力
- 1924年『人文東洋主義』(巣園発行):
「デモクラシーの本場」たる**アングロサクソン**と
「人文東洋主義」の日本**最終戦争**に備えて、
神社などの文化を世界に共有することを説く。
「神道学建設」の延長として提示
- 1940年1月「社会正義と国家道徳」(『丁倫』):
人間の精神は「**デモクラティック**にならなければ」。
一方で**ヒトラー**と**英仏**の両方に「生々」達成を是認

神道家の活動……
イ、粗暴な政治論や反対的な社会運動をして居る間に日本は孤立無援に陥る
ロ、宗教は國家に關係せざるを宜しとする……
ハ、神社の建設をして世界に遍からしむべし……
ニ、靖國神社には外國人を祀らぬが西洋人自身のを建てゝやるべし……
キ、十三派神道の一々に就いて世界的の意味を發見すべし……
ヘ、西洋人の高尚なる道德思想は猶太倉庫より來たた
ト、西洋のハイエーストボーションの人は道徳堅固であるが日本は反對である
チ、アングロサクソンは直接に神道を敵とする……

Next ➔

18

提唱以降②『生々示修養教本』をどう位置づけるべきか

- 1941年10月の『生々示修養教本』では、「地球の表面」という規模での「生々発展」を考え、停滞した「歐羅巴の権力主義」に対する新たな「刺激」としてのヒトラー・ムッソリーニ
- 戦後の復刻版(『生々主義哲学綱要』別巻)では削除
- 1934年時点ではヒトラーの焚書・民族迫害・優生政策を明確に批判
- 日独防共協定に沿わざるをえない状況下、地球規模での「生々」への「刺激」まで抽象度を上げ、デモクラシーを持ち出すことで相対化？

Next 

19

提唱以降③『大東亜世界観』と「生々哲学」

- アメリカ・イギリスとの開戦後は、東西対決の視点が再び明確に
- 1943年『大東亜世界観』:デモクラシーと神道の対決
- 1942年「学者何をかなす」(『丁倫』):「支那哲学史と社会学と古典学」など個別の学問をあきらめて「生々哲学」へ専念
- 1943年「生々威儀」(同):生々示宇道場にイザナギ・イザナミを祀り(ムスピは「史書に伝説はない」)、ひたすら「国体」「生々」を考える
- かつての神道学構想に含まれていた実践だが、建設の余裕はない

Next 

20

提唱以降④ 「夢より醒めて」

- 1945年11月「夢より醒めて」(『丁倫』)：
日本が戦争に負けたのは軍閥・官僚・財閥の専横で人民に自主・責任がない「デモクラティックでない」状態になってしまったため。
「日本のデモクラシーは板につかない」
- 西洋の知識を蓄えつつ「日本の古典を攻究す」べき(従前の主張)
- 1946年1月「デモクラシーとわが文化」(同)：
「民本主義」の採用、各家庭のアマテラス崇拜、「宗教ではない」
- 「宗教」の扱い以外は1900～10年代の議論へ回帰

Next

21

むすびに① 遠藤による神道論の特徴

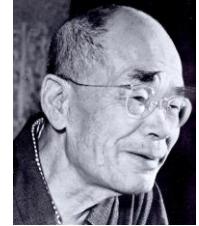
- 「東洋倫理学」「綜合心理学」などと同様に「日本神道学」構想も提示
- 藤田東湖との類似(蝦名)。近世学問に似た総合的・全人格的「学」
- 君主制と、毒抜きされたデモクラシーの両方につながる「生々主義」
- 重視する神格の変化：
アマテラス(1904年)からイザナギ・イザナミ(1909年)、ムスピ(1917年)、イザナギ・イザナミ(1943年)、アマテラス(1946年)
- ムスピに拠る「日本神道学」構想は大正デモクラシーとともにあった

Next

22

むすびに② 鈴木大拙・折口信夫との比較

- 1946年6月の鈴木大拙「日本の靈性化」:
「ドイツ哲学」にかぶれた神道家が戦争を招いたとし、
「むすびの神を本尊とする神道」の「生生主義」を有害視
- イギリス流の木村鷹太郎ではなく、ドイツ流の遠藤？
- 同月の折口信夫「神道の新しい方向」:「産靈神」を
「祖先」ではなく「宗教神」として理解しなおすことを説く
- 折口の神道論は久米事件など近代のいくつかの議論に
重なるが、生々主義の語は出てこない(近代と戦後の一つの差異)



Next ➔

23

むすびに③ 現在の再評価

- 『生々主義哲学』の現代的読解: 枝岡大輔「生々する理想としての現在—遠藤隆吉の生々主義哲学についてー」(『千葉商大紀要』)
- 神道関係では、自然と人間をめぐる「普遍性や「むすび」」の説とする
- 「生々哲学」を唱えた時期に最重視したイザナギ・イザナミでも、
戦後のアマテラスではなく、ムスピが取り上げられている(天皇不在)
- インターネットとの関わりでムスピが再解釈される時代性(藤田直哉
『新海誠論』)と、おそらくは無意識に通底。
では、天皇や民主主義については？(茂木謙之介『SNS天皇論』)

Next ➔

24